

[学術論文]

自我体験の報告の安定性に関する研究

— 小学校高学年生と大学生を対象とした1年の間隔を空けた2回の調査より —

The stability for the contents and the ratio of the reports about “Ego-experience”
:from the two studies by the interval of a year for the higher grades of the
elementary school and undergraduates

天 谷 祐 子

Yuko AMAYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 22

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 22号
2014年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2014

[学術論文]

自我体験の報告の安定性に関する研究

—小学校高学年生と大学生を対象とした1年の間隔を空けた2回の調査より—

**The stability for the contents and the ratio of the reports about “Ego-experience”
:from the two studies by the interval of a year for the higher grades of the
elementary school and undergraduates**

天谷 祐子
Yuko Amaya

要旨 小学校高学年から中学の時期において、約半数の人に見られる「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—に関する報告が、どの時点において調査を行ったとしても同程度の割合で同質の内容が安定的になされるのかについて、1年の間隔を空けた2回のインタビュー調査・質問紙調査により検討することを目的とした。大学生の場合、インタビュー調査において2調査間の尺度得点の相関が高く、協力者自身の主観的判断においても同じ内容であると回答した人が8割を超えた。質問紙調査においても、2回の尺度得点間の相関は高かった。つまり調査手法の違いを超えて、ある程度安定的な報告が得られることが示された。一方小学校高学年生の場合、調査協力者の主観的観点からは報告内容の安定性は高かったが、調査時点の興味の強さや言語報告の未熟さの影響を受けることにより、多少の分類カテゴリーの移動が生じた。小学校高学年生の場合には大学生と同程度とは言えないが、ある程度の安定性は見出されることが確認された。

キーワード：自我体験、安定性、インタビュー調査

I. 問題と目的

「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—は、小学校高学年から中学の時期において、約半数の人に見られる（天谷，2002）。自我体験の経験の有無により、その後の認知的要因・適応のありように相違が出てくるという知見が見られるが（例えば天谷，2009）、これらの研究の多くが大学生を対象とした質問紙調査によって得られた知見である。自我体験を経験した当時からタイムラグがある場合、過去の自我体験の報告について、発達段階のどの時期に調査を実施する

かにより体験率や体験内容が変動する可能性があり、他要因との関連のありようについての評価にも影響を及ぼす可能性が考えられる。

自我体験の報告される割合に関して、体験される時期からタイムラグがあった場合の捉え方について天谷（2004）は、中学生から大学生を対象に自我体験に関する質問紙調査を横断的に実施している。その結果、自我体験「未経験群」は中学1年と中学2年で多く、自我体験「経験群」は中学2年と高校2年で少なく大学生に多いという知見が得られている。つまり、中学生と高校生においては、学年が上がるにしたがって経験群が必ずしも増加または減少するというわけではないということが見出されている。

この点に関して、自我体験の経験を自伝的記憶という観点から捉えてみると、自伝的記憶の想起には、時間軸に基づいてなされるだけでなく、何らかの内容やテーマを共有する記憶が一つのクラスターを形成しており、そのクラスターを手がかりになされるという、階層的・多次的で柔軟な構造を形成しているという（佐藤，2002）。つまり、対象となる経験が、想起時から時間的に隔たりがあったとしても、内容的に共有された記憶に関わる何らかの手がかりが与えられると、想起されるということである。自我体験に関しても、実際に体験された時期からタイムラグがあったとしても、関連する内容についての手がかりを協力者に与えれば容易に想起することが可能となると考えられる。このような仮説に基づくと、天谷（2004）による体験率の値が、学年が上がるにしたがって変動しない点について、説明がつく。

一方で天谷（2011）では、高校生未満で学年にばらつきのある6名を対象とした3年の追跡調査を通して、一部の対象者について、過去に報告した内容が忘却され、体験当時以降想起内容が変動した可能性を指摘している。しかし対象人数が少なく、かつ学年にもばらつきが大きい対象者であったため、報告内容の変動が起こるのが一部の人のみなのか、もう少し多くの人に起こるのかは明らかになっていない。

本研究では、自我体験を経験する年齢の直後である小学校高学年生と、自我体験を経験した後タイムラグもあり、かつ自我体験と諸要因との関連を扱った研究が多く見られる大学生を対象に、1年の間をおいて2回の調査を行い、自我体験に関する報告に関する安定性の程度を明らかにすることを目的とする。研究1ではインタビュー調査により、研究2では質問紙調査により検討する。

Ⅱ. 研究1 インタビュー調査による自我体験の報告の安定性の検討

1. 目的

研究1においては、大学生と小学校高学年生を対象に、1年の間隔を空けた2回のインタビュー調査により、自我体験の報告の安定性を検討することを目的とする。具体的には、自我体験尺度得点の変動と、口頭での報告内容のTime1とTime2における調査協力者の主観的相違と、報告

内容に関する自我体験経験の有無の評定との関連を切り口として検討を行う。

2. 方法

(1) 調査協力者

- (a) 大学生群：大学生21名（男性2名、女性19名、平均年齢18.95歳、*SD* 0.89（Time1時点））であった。
- (b) 小学校高学年生群：小学校5・6年生17名（男性10名、女性7名）であった（Time1時点）。小学校5年生は12名、6年生は5名であった。

(2) 調査時期

大学生群は、Time1は2011年10月～2012年1月、Time2は2012年10月～12月に実施された。小学校高学年生群は、Time1は2012年5月から8月、Time2は2013年7月から9月に実施された。

(3) 調査内容

- (a) 自我体験の経験の有無を尋ねる質問項目：天谷（2005）による自我体験尺度15項目を使用した（5件法）。その後15項目の自我体験に関わる内容のうち、最も考えた内容についてその詳細を具体的に記載する欄を設けた。
- (b) Time1とTime2の報告内容の主観的相違に関する質問（Time2のみ）を設けた。

(4) 手続き

個別に実験室にて実施された。調査に先立ち、大学生群に対しては調査協力者本人に調査内容や手続き、データの扱いについての説明を行い、同意書にサインをした協力者のみが調査に参加した。小学校高学年生群に対しては、調査協力者本人とその保護者に、調査内容や手続き、データの扱いについての説明をした書類に予め目を通してもらい、同意書にサインをした書類を持参した協力者のみが調査に参加した。調査開始後まず質問紙を渡し、自我体験尺度15項目の評定、最もよく思った体験に関する自由記述を求めた。その後、個別インタビューにより質問紙の記述内容の詳細を尋ねた。この時点から調査協力者の許可を得て、インタビュー内容の録音と手元の録画を行った。Time1・Time2ともに同じ調査内容・手続きであった。さらにTime2においては、Time1と同様の手続きを経た後、Time1における自身の質問紙の原本とインタビューデータの要約を調査協力者に見せながら、Time1における回答内容とTime2における回答内容の同じ点や異なる点について質問を行った。自身のTime1における回答を明確に記憶している調査協力者はいなかった。なお本研究の実施に先立ち、名古屋市立大学大学院人間文化研究科研究倫理委員会において、研究内容についての承認を得た。

(5) 結果の整理

Time1・Time2ともに、録音された音声を文字に起こし、自我体験尺度の評定と合わせて、自

自我体験の経験の有無（経験群／未経験群）に関して、著者が評定を行った。

3. 結果

(1) 自我体験の経験の有無の評定

質問紙における自由記述内容と、インタビューにおける報告内容から、自我体験とみなせる基準（天谷，1999）を満たした報告を「自我体験経験群」とした。そして基準を満たさなかった報告を「自我体験未体験群」とした。その結果、「自我体験経験群」は大学生群においては、Time1では14名（体験率66.7%）、Time2では9名（体験率42.9%）であった（Table1）。Time1・Time2ともに同じカテゴリに割り振られた調査協力者は66.7%であった。

小学生群においては（Table2）、「自我体験経験群」はTime1では8名（体験率47.1%）、Time2では9名（体験率52.9%）であった。2時点それぞれにおける体験率の変動はあまり見られないが、2時点において同じカテゴリに割り振られた調査協力者は47.1%、2時点においてともに「自我体験経験群」に分類されているのはうち4名（全体の23.5%）であり、2時点ともに「自我体験経験群」に割り振られている人がそれほど多いわけではないことが示された。

Table1 Time1とTime2での自我体験経験有無
評定人数(大学生群)

		Time2	
		自我体験 経験群	自我体験 未経験群
Time1	自我体験 経験群	8	6
	自我体験 未経験群	1	6

Table2 Time1とTime2での自我体験経験有無
評定人数(小学校高学年生群)

		Time2	
		自我体験 経験群	自我体験 未経験群
Time1	自我体験 経験群	4	4
	自我体験 未経験群	5	4

(2) 自我体験尺度得点のTime1とTime2の関連

Time1とTime2における自我体験尺度15項目の合計得点を自我体験尺度得点とした。Time1とTime2の自我体験尺度得点の相関係数は大学生群では.80 ($p < .001$)、小学生群では.59 ($p < .05$)であった。

またTime1とTime2の自我体験尺度得点について対応のある t 検定を行ったところ、大学生群において、有意差は見られなかった ($t(20) = .13$, n.s. Table3参照)。さらにTime2における「自我体験経験群」と「未経験群」の分類を基準に同様の分析を行ったところ、大学生群においては、「経験群」はTime1とTime2の自我体験尺度得点の相関が.76 ($p < .05$)、対応のある t 検定では有意差は見られなかった ($t(8) = .98$, n.s.)。「未経験群」はTime1とTime2の相関が.81 ($p < .001$)、対応のある t 検定では有意差は見られなかった ($t(11) = .68$, n.s.)。

小学生群においては（Table4）、Time1とTime2の自我体験尺度得点について、対応のある t 検

定を行ったところ、有意差は見られなかった ($t(12) = .95, n.s.$)。さらに大学生群と同様に、Time2における「自我体験経験群」と「未経験群」の分類を基準に、協力者を「自我体験経験群」と「未経験群」に分け、群ごとに同様の分析を行ったところ、「経験群」はTime1とTime2の自我体験尺度得点の相関が.39であったが有意ではなく、対応のある t 検定では有意差は見られなかった ($t(6) = 1.05, n.s.$)。「未経験群」はTime1とTime2の相関が.76 ($p < .05$)、対応のある t 検定では有意差は見られなかった ($t(7) = .15, n.s.$)。

Table3
自我体験尺度得点のTime1-2間の対応のあるt検定結果
(大学生群)

	N	Time1	Time2	t値
自我体験尺度得点 (全体)	21	47.19 13.93	46.95 12.51	.13
自我体験尺度得点 (経験群)	9	53.22 12.95	50.44 10.00	.98
自我体験尺度得点 (未経験群)	12	42.67 13.37	44.33 13.94	.68

注: 分類はTime2時点、上段が平均値、下段がSD

Table4
自我体験尺度得点のTime1-2間の対応のあるt検定結果
(小学校高学年生群)

	N	Time1	Time2	t値
自我体験尺度得点 (全体)	13	40.73 12.91	46.73 13.52	.95
自我体験尺度得点 (経験群)	6	39.67 10.86	45.83 14.66	1.05
自我体験尺度得点 (未経験群)	7	44.00 14.75	44.57 13.60	.15

注: 分類はTime2時点、上段が平均値、下段がSD

(3) Time1とTime2の報告内容の主観的な相違

Time1とTime2における報告内容の協力者自身の主観的相違について、Time1とTime2の報告内容を「同じ内容」と回答したのは、大学生群においては18名であった(割合は85.7%)。Table5は、大学生群において、Time1・Time2ともに「経験群」と判定され、協力者本人にとっても主観的に「同じ」とであると判断されたケースである。Table5のケースは、1年の間隔を空けた場合であっても、安定的に自我体験の報告がなされたケースである。

一方Table6は、大学生群において、Time1時点で「経験群」と判定され、Time2時点で「未経験群」と判定され、協力者本人にとって主観的に「異なる」話であると判断されたケースである。Table6のケースの場合は、Time1時点で報告された内容はTime2では報告されず、Time1時点とは異なる内容がTime2時点において報告されたため、Time1からTime2にかけてカテゴリの移動が生じたケースであった。

一方、小学生群においては、Time1とTime2における報告内容の主観的相違について、「同じ内容」と回答したのは12名であった(割合は70.6%)。ただ、主観的に「同じ話」と回答し、評価によってTime1とTime2ともに同じカテゴリに割り振られたケースは「経験群」が3名、「未経験群」が3名であった。主観的に「同じ話」と回答し、評価によってTime1とTime2で異なるカテゴリに割り振られたケースは6名であった。内訳としては、Time1において「未経験群」だったがTime2において「経験群」となったケースが3名、Time1において「経験群」だったがTime2において「未経験群」となったケースが3名であった。

Table5

Time1(経験群)とTime2(未経験群)で、協力者本人にとっても「同じ」と判断したケース

	Time1	→	Time2
項目番号	2番		1番、2番
時期	小学校中学年		小学校高学年
場面	自分のこれからの人生、進路を考えていた時		1人でぼんやりしている時
内容	<p>ちょっと非科学的ですけど、何か体とたましい、が何か別物みたいな話を聞いたこともあったし、何となくその自分の体が死んだとしても、この考えてることとかがなくなるのかなあというのが、何か信じきれないというか半信半疑な感じで、もし体が死んだ後に魂だけが出るというか、魂だけが独立するのかなっていう疑問みたいな。</p> <p>その後別で15番あたりを、なぜこの時代に、この国で生まれたのか、みたいなのが、だんだん根本的な自分の存在が不思議だとか、何かどっから来たんだろうとか、なぜこの体なんだろうみたいな。</p>		<p>このくらいの年になると人間の生まれる生物学的なことを習うじゃないですか。そうやって学術的に聞くと、そうやって生まれてくるんだっていう感じなんですけど。でもそういう科学的なことじゃなくて、自我とかたましいとかもその時に出来てる。その時から成長して生まれてくるのか、それとも元々あってそういうものが体に入り込むっていうと変ですけど、そういうふうになるのかなとぼんやり考えてました。</p> <p>その延長線上みたいな感じで。今はこうやって生きてるけど、死んだらどうなるのかなとか、死んで体が消滅したらその自我っていうかたましいとかも消滅するんだろうとか。</p>

Table6

Time1(経験群)とTime2(未経験群)で協力者本人が「異なる話」と判断したケース

	Time1	→	Time2
項目番号	4番		3番
時期	中学3年		小学校高学年
場面	車に乗っていて歩いている人をぼーっと見ている時		小学校高学年の時から考えていて、今就職活動の自己分析で多く考え
内容	<p>なんでこんなにたくさんの方がいるのに、私は私で生まれたんだろう、不思議だなと考えた。「不思議だな」で特にそこから考えてもわからないよみたいな。</p>		<p>自分のことを振り返って自分がどういいう人間なのかということ考えた</p>
Time1の発言を見たTime2の感想			最近は(Time1の内容を)考えないです。

4. 考察

自由記述に基づく評定では大学生群においては、Time1とTime2の結果の間で全体の3割弱に相違が見られた。一方自我体験尺度得点に基づく、大学生群においては、Time1とTime2の間で違いは見られず、両者の相関係数も高かった。さらに調査協力者自身による主観的判断からは、「同じ」とされることが多いことから、大学生時点の自我体験の報告に関しては詳細に関して判定基準を左右する多少の誤差があるにしろ、ある程度安定的なデータが得られていることが確認された。

一方、小学生群においては、Time1・Time2各時点における自我体験の報告される割合（体験率）はそれほど変化がないが、その内訳として、必ずしも同じ人が2時点で同じカテゴリに割り振られ、体験率が同じような値になるわけではないことが見出された。しかし、協力者自身の主観の観点からすると、Time1とTime2における報告内容は「同じである」と認識されていた。小学校高学年生・中学1年生の場合、その時点で興味のある内容であるか否かによって、報告される内容の詳しさに偏りがあつたり、まだ言語的に報告する能力が未熟であるため、十分詳しい内容を言語的に報告できなかつたりする可能性が考えられる。さらに小学校高学年生群のうち、Time1の後に自我体験を新たに経験し、Time2時点で自我体験を報告するケースも見られた。したがって、小学校高学年生群に関しては、調査を実施するタイミングによって、自我体験経験群に割り振られるか、未経験群に割り振られるかが変動する人たちが、半数を超えない範囲内である一定割合存在するということを念頭においた上で、自我体験の報告に関わる考察を慎重に行うことが求められる。

Ⅲ. 研究2 質問紙調査による自我体験の報告の安定性の検討

1. 目的

研究2で、質問紙調査により、過去の自我体験が安定的に報告されるのかどうかを検討することを目的とする。本研究では、大学生を対象に1年の間隔を空けた2回の質問紙調査を行い、自我体験とみなされる報告の出現割合と、自我体験尺度得点の変動、自由記述内容の相違を切り口として検討を行う。

2. 方法

- (1) 調査協力者：大学生167名（男性70名、女性97名、平均年齢18.92歳、SD.72）であった。
- (2) 調査時期：Time1は2012年7月から10月、Time2は2013年7月から10月に実施された。
- (3) 調査内容：(1)自我体験の経験の有無を尋ねる質問項目：天谷（2005）による自我体験尺度15項目を使用した（5件法）。その後最も考えた内容について、その詳細を具体的に自由記述できる欄を設けた。Time2においては、Time1時点における自身の回答の内容と同じか異なるかは気にせず、現時点において覚えていることに基づいて回答するよう求めた。

3. 結果

(1) 自我体験の経験の有無の評定

質問紙における質問項目の評定と、自由記述内容により、自我体験とみなせる基準（天谷，2000）を満たした報告を「自我体験経験群」とした。そして質問紙における質問項目の評定が5段階における下位（1または2）に評定し、かつ自由記述がみられなかった報告を「自我体験未

経験群」とした（その他を「自我体験未確定群」とした）。その結果、Time1における「自我体験経験群」は32名、「自我体験未経験群」は45名、Time2における「自我体験経験群」は29名、「自我体験未経験群」は35名であった。Time1とTime2における全体に占める「自我体験経験群」の割合（「経験率」）はTime1が19.2%、Time2が17.4%であり、先行研究による結果よりいずれもやや低い結果となった。

また、「自我体験経験群」・「自我体験未確定群」・「自我体験未経験群」のTime1・Time2の分類結果をクロス集計表にし、Time1からTime2にかけての評定の推移を検討した。その結果、Time1とTime2いずれも同じ群に分類された人は84名であり、全体の50.6%であった。クロス集計表の各セルの人数について、カイ二乗検定を行ったところ、有意であった（ $\chi^2=36.10$, $p<.001$, Table7参照）。Cramerの連関係数は.30であった。Time1・Time2いずれも同じカテゴリに分類されるセルが、そうでないセルよりも有意に多い結果となった。

Table7
Time1とTime2での経験の有無の分類結果とカイ二乗検定結果

		Time2			計
		未経験	未確定	経験	
Time1	未経験	19	20	5	44
		4.19 **	-2.54 *	-1.24	
	未確定	13	64	13	90
		-2.28 *	2.78 **	-1.12	
経験	3	18	11	32	
		-1.81 +	-0.67	2.80 **	
計		35	102	29	166

注. **: $p<.01$, *: $p<.05$

(2) 自我体験尺度得点に関するTime1とTime2の関連

Time1とTime2時点それぞれに関して、自由記述による群分けの3群の間で、自我体験尺度得点に違いがあるか否かについて、1要因分散分析を行った。その結果（Table8）、Time1について主効果が見られた（ $F(2, 151)=58.75$, $p<.001$ ）。Tukey法による多重比較を行ったところ、経験群が未確定群よりも得点が高く、未確定群が未経験群よりも有意に得点が高かった（ $p<.05$ ）。Time2についても主効果が見られ（ $F(2, 146)=60.30$, $p<.001$ ）、Tukey法による多重比較を行った結果、経験群と未確定群が未経験群よりも有意に得点が高かった（ $p<.05$ ）。

また、自我体験尺度得点に関して、Time1とTime2の間で相関係数を算出したところ、 $r=.65$ であった（ $p<.001$ ）。またTime1とTime2における自我体験尺度得点に関して、対応のある t 検定を行ったところ、有意であった（ $t(154)=2.39$, $p<.05$ ）。そこで「自我体験経験群」と「自我体験未経験群」を別々にしてTime1とTime2の関連を見ることとした。「自我体験経験群」では、Time1とTime2の間の相関が $r=.68$ （ $p<.001$ ）、対応のある t 検定の結果有意であった（ $t(28)=2.50$, $p<.05$, Table9）。Time1よりもTime2の得点が高い結果であった。そして「自我

体験未経験群」では、Time1とTime2の間の相関は有意ではなかった。また対応のある t 検定の結果、有意であった ($t(32)=3.86, p<.001$)。Time1よりもTime2の得点が有意に低い結果であった。

Table8
Time1とTime2それぞれの時点における自我体験の分類別の自我体験尺度得点の差異

	Time1				Time2			
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
1 未経験群	43	19.46	6.42	58.75 ***	34	17.29	4.19	60.30 ***
2 未確定群	80	40.93	14.65	1<2<3	88	46.73	16.13	
3 経験群	31	51.13	16.16		27	47.41	13.33	

注. ***: $p<.001$

Table9
自我体験尺度得点のTime1-2間の対応のある t 検定結果

	<i>N</i>	Time1	Time2	t 値
自我体験尺度得点 (全体)	155	36.94 17.25	39.83 18.61	-2.39 *
自我体験尺度得点 (経験群)	29	36.72 17.94	43.69 19.58	-2.50 *
自我体験尺度得点 (未経験群)	33	24.48 10.91	17.36 4.23	3.86 **

注. 分類はTime2時点、上段が平均値、下段が *SD*

(3) 自我体験の報告内容について

自我体験の報告内容について、Time2時点で「経験群」とされた自由記述を基点として、Time1時点で「経験群」であったケース (Table10、11名が該当)、Time1時点で「未確定群」であったケース (Table11、13名が該当)、Time1時点で「未経験群」であったケース (Table12、5名が該当) について代表的なケースを抜粋した。2時点ともに「経験群」であったTable10のケースは、経験時期や経験した場面、内容についてほぼ同じと思われる記述が得られた。ただ、該当者10名全てがこのようなパターンに該当するわけではなく、項目番号や内容がTime1とTime2で異なるものも散見された。

またTable11のケースは、2時点ともに項目番号や時期・場面は同じであるが、内容がTime1とTime2時点で異なり、自我体験とみなすか否かが異なったものである。調査実施のタイミングにより、どのような内容が協力者本人の経験から切り取られて報告されるかに変動がある場合もあることが示唆された。

そしてTable12のケースでは、Time1時点では「未経験群」とされていたが、Time2時点で記述が見られ、内容的に「経験群」と評定されたものである。本研究は質問紙調査のみにより実施されたため、Time1時点で想起できずに記述がなされなかったのか、自由記述記載の動機づけが単

に低かっただけなのかについて、判断することができない。面接調査に比して質問紙調査実施のタイミングにより、この種の変動が見られる場合がゼロではないことが示された。

Table10
Time1(経験群)→Time2(経験群)の自由記述例

	Time1	→	Time2
項目番号	15(自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本の、この時代に生まれたのか)		未記入
時期	小学校高学年		小学校高学年
場面	授業中ぼーっとしている時に		ぼーっとしている時。
内容	なんで日本に生まれたのか？なぜこの場所に生まれたのか？そもそも人って何？なんのために地球って生まれたの？何で宇宙って生まれたの？誰が宇宙を作った？こんな感じで無限ループが続く。		なぜ日本のこの場所に生まれたのだろう。

Table11
Time1(未確定群)→Time2(経験群)の自由記述例

	Time1	→	Time2
項目番号	3(自分は何だろう？)		3(自分は何だろう？) 7(自分の存在そのものが不思議だ)
時期	わからない		わからない
場面	ふとした瞬間に		ふとしたときに
内容	自分は何がしたいのだろう。自分らしさってなんだろう。		なぜ自分は今生きているのだろう、なぜこの顔で、この性格で、この体で、生まれてきたのだろう(なぜ今の私として生きているのだろう)など

Table12
Time1(未経験群)→Time2(経験群)の自由記述例

	Time1	→	Time2
項目番号	評定が全て1と2のみで記述なし		9(自分はなぜ自分なのだろう)
時期			わからない
場面			悩んでいたとき
内容			自分はなぜ自分なのか

4. 考察

本研究の結果、大学生時点で1年間の間隔を空けた場合、自我体験の3群の分類に変化のない人が5割強で、2時点における群の連関についてもある程度見られ、Time1とTime2で同じ群に割り振られる人が、そうでない人よりも有意に多いことが示された。さらに群別の対応のある t 検定の結果からは、自我体験経験群は時間の経過により得点がさらに高くなり、自我体験未経験群は得点がより低くなる可能性も示された。大学生時点における過去の自我体験の報告に関しては、ある程度の安定性が認められることが見いだされた。

しかし、協力者全体の中で一番多いカテゴリは、Time1・Time2ともに「未確定群」のカテゴリであった。質問紙調査では、研究者と協力者間のやり取りを行うことができないので、自由記述が十分に記載されているか否かが、自我体験とみなされるか否かを大きく左右する。したがって、調査に対する動機づけの低さが調査結果に影響する。確実にどの調査時点においても自我体験経験者や自我体験未経験者である人を多く収集するためには、多くの人に調査に参加してもらう必要がある。さらに、今後、自我体験を経験する年齢に近い小学校高学年生を対象に質問紙調査による安定性の検討を行うことが求められる。

IV. 総合考察

研究1においては、大学生と小学校高学年生を対象として、1年の間隔をおいたインタビュー調査を通して、研究2においては、大学生を対象として、1年の間隔をおいた質問紙調査を通して、自我体験の報告に関する安定性の検討を行った。その結果、大学生群においては、インタビュー調査であっても、質問紙調査であっても、強い正の相関が得られ、安定的な報告がなされることが示された。したがって、自我体験経験当時からタイムラグがあったとしても、大学生以降の時期においては時間的経過による影響をそれほど受けにくい可能性が示唆される。

一方、小学校高学年生の場合、大学生ほどには安定性は高くないことが示された。中学生を対象とした自我体験に関するインタビュー調査からは（天谷，2002）、自我体験の経験率は中学1年が50.0%、中学2年が66.7%、中学3年が71.4%と報告されている。小学校高学年以降、中学2・3年までの間に新たに自我体験を経験する人が、1割から2割程度存在しているのである。天谷（2004）の質問紙調査による体験率の推移からも、中学2年ごろまでは未経験群が多いことから、新たに自我体験を経験することが想定されている。本研究においては、半数程度の小学校高学年生が1年の間にカテゴリを移動したが、そのうち1割から2割程度は、今後自我体験を新たに経験するであろう人が含まれる可能性が考えられる。さらに、カテゴリの移動した半数程度から、この1～2割の者を除いた3割前後の人は、協力者本人の主観的観点から見ると同じ内容の話を経験しているつもりであっても、報告内容の詳しさや調査時点における興味関心の強さによって、自我体験とみなされる基準を満たしたり満たさなかったりする者である可能性が考えられる。今後小学校高学年生において、自我体験と諸要因との関連を考察していく際には、これらの理由により、ある時点では自我体験経験群となるが、別の時点では自我体験未経験群に割り振られる人が存在するという点を念頭におきながら慎重を期す必要がある。

V. 文献

天谷祐子．（1999）．面接法による自我体験の調査方法について．名古屋大学教育学部紀要，46，265-274．

天谷祐子．（2002）．「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から．発達心理

学研究, 13, 221-231.

天谷祐子. (2004). 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問いー自我体験ーの検討. 発達心理学研究, 15, 356-365.

天谷祐子. (2005). 自己意識と自我体験ー「私」への「なぜ」という問いーの関連. パーソナリティ研究, 13, 197-207.

天谷祐子. (2009). 自我体験とパーソナリティ特性・孤独感との関係. パーソナリティ研究, 18, 46-56.

天谷祐子. (2011). 私はなぜ私なのかー自我体験の発達心理学 ナカニシヤ出版

佐藤浩一. (2002). 自伝的記憶の構造. 群馬大学教育学部紀要, 51, 337-353.

(注) 本研究の一部は、日本教育心理学会第55回大会、日本発達心理学会第25回大会にて学会発表を行った。
また本研究は名古屋市立大学特別研究奨励費による助成を受けた（研究代表者：天谷祐子）。